

カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

第Ⅴ章 自然的世界

予備的考察

- 1 生と死の弁証法
- 2 死の願望と死の不安
 - A. ムルソオの身体像
 - B. 異形の身体
 - C. 生命的身体
 - D. 共生的身体 …… (この項の途中以上, 前号まで)
 - E. メランコリー…… (この項の途中まで本号)

第Ⅴ章 自然的世界

2 死の願望と死の不安

D. 共生的身体 (つづき)

「大急ぎで埋葬しなくてはならない、平野は暑く、とくにこの地方はひどいから」、従って「ここでは時間がなくて死の観念に馴染まぬうちに、柩車のあとをついて走らなければならない」という門番の話に我が意を得たかのように「彼の話は正当だし、面白いと思われた」(15-16)⁽²²⁶⁾とムルソオが述べるのも、外的な状況への対応のうちに心中の混乱を没却することこそ彼の願うところであり、己が母の死という「観念」から遠ざかればそれだけ母との一体感幻想が無傷のまま温存されるからに他ならない。

だがこのように母の死を否認することによって懸命に保持される母との一体

感幻想も次々に顕わになる客観的事実の前に破綻を来さざるをえない。つまり、母は現実においては彼の根源的了解の対象ではなかったのではないかという疑念をムルソオが抱かずにはすまないような事実が次々と顕われてくるのである。先ず、葬儀の形式のことがある。院長によると「お母様はどうもお友達の在院者達に、宗教に則った葬式をしてほしいとよくおっしゃっていたらしい (parait-il)。(傍点は鈴木、以下同じ)」しかしムルソオの記憶では「ママは、無神論者ではなかったが、生前は宗教について考えたことは一度もなかった。」第三章の第三項においては、この院長の説明は慣行を遵守して儀式を円滑に運ばせたいがためのものなのだという推定を下しておいた。それだからこそ「らしい」に留まるにも拘らず院長は喪主のムルソオに事前の相談もなく、あるいはその時間的余裕がなかったとすればそうした釈明を付することもなく、独断で事を決め、「私が責任をもってそうとりはからっておきました」(13)と言って恬然としているのである。だが院長のこの確信に充ちた態度を眼前にする者には「らしい」という推測は断言と聞こえるであろう。更に「らしい」という厳密を街った表現はムルソオに院長の管理者的発想と修辞に思い至らしめるよりは、却ってことは事実であったかもしれないという、つまり現実に母は彼に「もはや何も期待するところなく」、自分の「新しい生活」(125)をもつに至った、共有のものではない生活の領域をもつに至ったのではあるまいかという疑懼の念を強めさえするであろう。この不安の強さの故に、それを打消そうとして「生前は」と彼は言うのである。しかし「家にいたとき、ママはいつも黙って僕のことを眼で追っただけであった」とするならば、そして彼が「今年になってからほとんど」(12)母に会っていないとするならば、「生前」の母の宗教観を云々する権利は事実上彼にはないことになる。従って母の信仰心についての彼のこうした断定的主張は、母への根源的了解の確信つまり一体感幻想に支えられてのことであり、又その保持のためのものなのだと言わなければならない。

次いで母の知られざる交友関係の一端が明らかになることによって、見知らぬ母の横顔がムルソオに突き付けられる。先ず、通夜の席で泣き続ける「ひと

りの女」(19) がいる。門番によると女はムルソオの「母様とごく仲よし」(20) であった。「それが知らない女なので、僕はひどく驚いた」(19) とムルソオは言うが、彼には通夜に同席した「母の友人達」(18) の誰ひとりとして「知」っている形跡が認められないのだから、彼が「驚いた」のは単に母の友人だというその女を「知らない」からだけではなく、自分の「知らない」人間が母と「ごく仲よし」であることを銜う如く「泣き続けた」(19) からに他なるまい。母子水入らずの一体関係の中に見知らぬ赤の他人が割り込んできて、自分が知悉していた筈の母の内面世界に「知らない」領分の境を設けようとしているのである。それ故ムルソオは「ひどく驚」き、女の泣き声を「もう聞きたくない」(19) と排他的な感情をあからさまにするのである。

更にペレという母の「許婚」の存在が明らかになる。おそらくこれこそムルソオの母子一体感幻想に決定的な打撃を加えるものであったろう。在院者のうちペレだけは例外として葬式に参列することを許されたが、その理由を院長は「おわかりでしょう。ちょっと子供っぽい感情 (sentiment un peu puéril) です。しかし彼とお母様はほとんどいつも一緒でした。院の中で、皆がからかって、ペレに〈あれはあなたの許婚だ〉と言うと、彼は笑っていました。そう言われるのが二人とも嬉しかったのです。実際、ムルソオ夫人の死は彼にひどく応えています」(23) と述べている。後にペレは法廷で「自分は僕〔ムルソオ〕の母を特によく知っていたが、僕には葬式の日に一度会っただけだ」(129) と証言する。結局、「今年」(12) になってムルソオが姿を見せなくなった半年程の間に母はペレと急速に親しくなったか、あるいは「ほとんどいつも」が母の入院以来のこの「三年」(11) に互って言われているとすれば、その間ずっと息子ひとりが知らぬところで母はペレと深交を結んでいたということになる。いずれにせよここに母子一対の幻想は崩れ、ムルソオはペレのうちに「自分をゼロにし、ある意味で自分にとって代る」(147) 男の存在を認めざるを得ない。「ちょっと子供っぽい感情」とは母とペレの「許婚」ごっこを「からかって」評するものであるが、それに続く「ムルソオ夫人の死は彼にひどく応えています」という

院長の断言はペレをムルソオに彼の母の死を嘆く格別の資格を有する者として彼の母を「特によく知っていた」者として強く印象付けないではないし、その「子供っぽい感情」の深刻な実態に気付かせないではない。ここにムルソオの「ちょっと」どころか本質的に「子供っぽい感情」である母子一体感は激しい動揺に晒されるのである。後に彼は「誰ひとり、誰ひとり彼女〔母〕に涙をそそぐ資格はない」(171)と断言することによって、すべて彼の母の死を悼み彼の母を「特によく知っていた」と主張する人々を徹底的に排除し、全き母子一体感の再生に努めるであろう。既述のように彼の視線が描出するペレの「破壊された顔」(29)という表象には彼の心中における活性化した破壊的攻撃性的作用を認めざるを得ないのであるが、その誘因のひとつに自分のライバルに収まっている男への敵意があったと言えるであろう。

母親との関係が共生的な人間には、母の死は母に一体化している自分自身の死の前兆と見えるので死の不安が激化するが、それとともに母の死は母との決定的な別離を意味するから分離不安も昂じる筈である。更に、子供にとって近親者とりわけ母親の死が意味するところは「自分が取り残される」⁽²²⁷⁾ということであり、しかもそれは死者の「怒り」⁽²²⁸⁾や「悪意ある遺棄」⁽²²⁹⁾の結果であると想像されると、又他方では愛の対象に下る死そのものも「人の怒りや攻撃性」⁽²³⁰⁾の結果であると想像されると言われている。母と共生関係にあったムルソオは、認識の水準では母の死を「遅かれ早かれ来るべきことだ」(51)と捉え「自然現象」⁽²³¹⁾と割り切りつつも、共生的人間の心の深層に脈打つ「子供っぽい感情」の水準ではこれを母の「怒り」の、息子を「遺棄」しようとする母の「悪意」の表われと受け取ろう。そのような想像にも十分な根拠がある。彼は「今年になってほとんど」(12)母を養老院に見舞わなかったのだから母の「怒り」を招いたとしても当然のことであるし、「許婚」との「新しい生活」のために母が息子を「遺棄」して息子から「解放され」(171)たいと思っていたとしても無理はないからである。更に重要なことは、小児においては愛の対象の死は又「人の怒りや攻撃性」の結果とも空想され、そうした「子供っぽい感情」が威を振り成

人の「意識されていない思考にとっては、自然死によって死んだ人も、やはり殺害された人である。悪しき願望が彼を殺したからである⁽²³²⁾」とするならば、ムルソオは「自分の愛する者の死を多少とも希った」(94)筈であるから、自分の「攻撃性」の故に母は死んだのだという空想が彼の無意識裡に生じたとしても不思議はない。かくして母の死は、それが喚起する息子自身の死の不安の故に、分離不安の故に、そして怨霊として蘇る母への恐怖の故にも否認されなくてはならないことになる。前章で述べた現身としては不在でありながら物語全体に遍しムルソオに死を受容させるに至る知恵の化身として理想化された母の本体こそ、彼の心の深層にゆらゆらと立ち現われるこの怨霊としての母に他ならないのである。

死んだ母が幽霊として黄泉から帰ってくるという発想は共生的人間にとってはごく自然なものである。というのも、「幽霊について最も奇抜なことは、それが他のものとの間にもつ融合性である」が、「幽霊が入り込みたいと望めば、何者もそれを防ぐことはできない。このパターンは、馴染み深いものである。これは言わば、共生という概念の中核をなすものである。それはしばしば子供と母親とのごく初期の関係がどのようなものであるかを象徴的に表現するもの、とも言えよう⁽²³³⁾」と言われており、共生的人間とはまさに母子の「ごく初期の関係」に拘泥する者の謂に他ならないからである。先に『ムルソオの身体像』の項で述べた語り手の融通無碍の身体もまたこの「幽霊」の身体なのであり、共生的人間の想像力の所産なのである。

「ママにすぐに会いたかった」(11)筈のムルソオであるが院長に「きっとお母様にお会いになりたいでしょうな」と言われたときは「何も言わずに立ち上った。この無言は、葬式という儀式において宛がわれた役割を果たす以上のことを期待されていないと判断して院長の話を「もうほとんど聞いていなかった」(12)放心状態の表われであるとまずは解釈され、またこの無言の機械的な挙措によって役割を期待された通り果たすことを約束しているかの印象を与える。しかし後にムルソオが門番とする問答では事態は一層明らかになることで

あるが、この時点で既に彼の心中において直截に母に会いたいと言わせない何かが生じてきているのだと見ることもできよう。というのも、彼が「ママにすぐに会いたかった」と言ってからこの院長の言葉を聞くまでの間において、彼は院長に「あなたが唯ひとりの扶養者だった」と言われ「何か非難」(11)されていると感じたし、又「今年になってほとんどここ〔養老院〕へ足を向けなくなった」(12)という事実を想起してもいるからである。彼が抱く母子一体の確信は現実的な根拠をもたないことをそうした断片的事実が証しているのである。むしろ彼は今や母の「非難」をこそ予感せざるを得ないのである。

このような脅えを潜めてムルソオは霊安室に入るのである。「僕は入った。非常に明るい広間で、石灰で白く塗られ、ガラス天井でおおわれていた。椅子とX字型の台がいくつか備え付けてあった。その台が二つ、中央に置かれて、蓋をした棺をのせていた。ただ何本かのキラキラしたねじ釘が、ほとんど差し込まれてないまま、胡桃酒色に塗った板の上に光っていた。」(13)

一般に部屋は母胎の象徴の一つと言われるが、ここに描写されている部屋は先ず「非常に明るい」、「石灰」と「ガラス」で覆われた無機質な空間であって、しっとりとした暗さや暖かさ、柔らかさを連想させる母胎とは正反対のものである。この乾いて硬質な部屋の「中央に」は、二つの「X字型の台」の上に「ひとつの棺」が置かれている。「X」は形それ自体からして硬い拒否的な印象を与えるが、数学では未知数、一般的にも未知の物や人を意味する。それは柩の中の母がムルソオを硬く拒む未知の人に変貌していることを暗示しているかのようだ。更に棺の蓋の上には硬い「キラキラするねじ釘」が削き出しで突っ立っている。このねじ釘のイメージの禍々しさはもはや攻撃的とすら言える。そして釘は「ほとんど差し込まれてないまま」なのである。棺の中にはムルソオの見知らぬ無気味なもの、恐るべき敵意を秘めたものが潜んでおり、それがいつ「胡桃酒色」の蓋を撥ね除けてそのおぞましい面貌も顕わに襲いかかり、彼を取り殺すとも知れないと思われるのである。勿論このような妄想は彼の「意識されていない思考」に属するが、この「影はひとつもなく」(13)照し出され

た部屋の中で唯一箇所だけ影と闇を潜めている所があり、それが棺であり、ムルソオの意識の眼には見えない棺内の闇こそ彼の無意識の領野そのものであると言えよう。

『無気味なもの』は実際にはなんら新しいものでもなく、また、見知らぬものでもなく心的生活にとって昔から親しい何ものかであって、ただ抑圧の過程によって疎遠にされたもの⁽²³⁴⁾であるとフロイトは言っている。この「昔から親しい何ものか」は「抑圧された小児的コンプレックス」であるか又は「克服された原始的確信(傍点は原著者)」⁽²³⁵⁾である。母の死の衝激はムルソオの抑圧された攻撃性を核とする「小児的コンプレックス」を揺り動かすとともに、「死者は生き残った者の敵となってしまう、死者という自分の新しい生存の仲間として生き残った者をたえず一緒に連れて行こうとしているのだ⁽²³⁶⁾」という彼の心の深部に残存する「原始人のアニミズム」⁽²³⁷⁾的思考法を活性化させ、前者の秘められた攻撃性の存在が後者の原始的確信を増幅する。このようにして母というこの上なく「親しい」ものがこの上なく「無気味なもの」に転ずるのである。前節で語り手としてのムルソオが自己の無意識の領域をその語りから徹底して排除しようとしていることを指摘した。彼の意識至上主義が無意識の意識化にではなく、徹底した抑圧に抛ろうとするものである限り、その「アニミズム的な確信を徹底的に完全に払い落としてしまった人」⁽²³⁸⁾という外見にも拘らず、秘められた「小児的コンプレックス」はこの意識の装い故にかえて増える「無気味なもの」として顕現してくるのである。ムルソオの「小児的コンプレックス」の実態は以下追々明らかになるであろう。

このような深層心理を背景に置けば、彼に母の顔を見せようとして「棺に近寄った」門番をムルソオが「制止した」ことも、彼が門番に母との対面を「望まない」(14)と答えたことも納得できる。だが彼は葬式という社会的儀式の中で宛がわれた役割を機械的に果たすことのうちに、外的世界への実際的配慮のうちに没頭して母の死に直面することを回避しようとしていた筈であった。そうした周到な実際的配慮という意識の防衛網そのものが、その力の及ばぬ所で

母の死の衝激に震撼され解離した「小兒的コンプレックス」を動機とする「望まない」という返答によって、思わぬ破綻を来すのである。それ故我に返ったムルソオは「こんなことを言うべきではなかったと感じて、僕は当惑した」と言うのである。「何故ですか」と門番に問われても、意識の及ばぬ力が彼に口走らせた返答なので、「分かりません」(14)と答える以外にないのである。

門番に勧められてミルク・コーヒーを飲み、「煙草が喫いたく」なって「ママの前でそうしてよいかどうか分らなかったので、躊躇した」が、「考えてみると、まったくどうでもよいことだったので、躊躇した」(17)と思ひ直して門番と喫う。前章の第三項では、彼のこの行為は、哀悼の念と喫煙とは何の係わりもないという彼の判断に基づくものであると推定しておいた。だがそれは意識の水準での解決に留まる。ここでは更に、「まったくどうでもよいことだ」という言葉には虚勢の響があり、そう言い切ることによって彼は自分の意識から次第に呪縛力を帯びて圧迫してくる無気味な何ものかを払い除けようとしたのだと言わなければならぬ。

母の死の否認は単にその死の事実の否定に止まらず、母の実存の否認、つまりムルソオと固有の係わりをもつひとつの歴史的身体の歴史性即ち「現実性」(18)や「意味」(20)の消去にまで至り、この内的過程が外部に投影されて、母の亡骸は単なる任意の物体 = 死体 (corps) にすぎないと彼の眼に映ることになる。彼が霊安室で「少しうとうと」(18)しかける前には未だ、「彼〔門番〕はママの向う側に、僕と向いあって坐った」(17)と言われている。そこへ「ママの友人達」(18)が入ってきて彼のうたたねの邪魔をする。

この場面における外界からの過剰な不快刺激を誘因とする破壊的攻撃性の昂進とその外界への投影による被害妄想的な知覚の対象構成については前節で指摘した。又本節においては先に、「友人達」の老醜が掻き立てた彼の死の不安からする防衛的な姿勢や敵意もそうした知覚の対象構成に与っていると述べておいた。ここでは、既述の如く共生的人間にとって死はすべて外界からの「怒りや攻撃性」の結果と想像されるのであるから、漠たる死の不安の昂まりは直

ちに外界全体に漠たる脅威の色合を与えるだろうし、又母の死は「悪意ある遺棄」と想像されるが当の母がその死を否認されているところでは「遺棄」の原因としての母の「怒りや攻撃性」も母という特定の個人の上から外界全体の上へと拡散するのであると、つまり分離不安も又被害妄想的知覚に与っていると云わなければならない。更に、霊安室の老人達がまさに「ママの友人達」であることに注意しなければならない。母が「養老院で始めのうちはよく泣いた」(12)ことはムルソオ自ら認めるところであり、院長も後に「ママが僕〔ムルソオ〕のことをこぼしていた」(126)と証言する。確かに理性の水準において、「数ヶ月して、もし養老院から引きとったら、泣いだろう」(12)とか「家族のことをこぼすのは、幾分在院者達の病理のようなものだ」(126-127)という釈明がそこになされえようとも、もともと共生的人間の母子一体感が現実否認に成り立つ幻想的なものである以上、逆にその破綻の仕方も理性の統御の利かない幻想的妄想的なものにならざるを得ないであろう。ムルソオの「知らない」老人達はすべて「ママの友人達」であり、彼の母の「よく泣いた」のを見ており、彼のことを「こぼしていた」ことを知っている。そして彼の眼にも漸うその一端が垣間見えてきた母の「新しい生活」は彼等の知悉するところである。彼等はただ彼の前に居るだけで彼の母子一体の幻想を破綻させる。加えて老人達は彼の母と同じ境遇にあるのだから、彼等と母が重なってムルソオの眼に映ったとしても不思議はない。母の怨霊が老人達に憑依して見えるところに彼の怯えと不安があるのだとも言えよう。

さて母の死の事実の更にはその実存の否認という内的過程が外界に投影されるとそこに見えてくるのはもはや「ママ」ではなくてただの棺でありただの女の死体にすぎなくなるのだが、この内的過程が老人達の裡に投影されるとそのように見る主体はムルソオではなくて老人達だということになる。即ち老人達は「棺や自分らの杖、あるいは何でも構わず見つめて、他には目をやらなかった」(19)と彼の眼には映るし、「彼等の真ん中に横たわっているこの死人(cette morte)が、彼等の眼にはなんの意味もなさないのだという印象さえうけ」(20)

るのである。他方、かくその死と実存を否認された母は却って老人達に憑依し、その結果 ムルソオを故無く告発する老人達という被害妄想的心象が生れてくる。「彼等〔老人達と門番〕がそこにいるのは、僕を裁くためだ」という「印象」(19)を彼はもつし、夜半に目を覚ましたときには、老人達のうち「唯ひとりだけが〔……〕まるで僕が眼をさますのだけを待ちうけていたように、じっとこっちを見詰めていた」(21)と言っている。彼の心の深層には、その老人の眼が「いつも黙って僕のすることを眼で追うだけであった」(12)母の眼と重なって映っていたに違いない。

こうして通夜は老人達にとって以上に、ムルソオ自身にとって一層「辛い (incommode) 通夜」(21)であった。「疲れていたし、腰が痛かった」(20)と言うように、不快な (incommode) 身体感覚の故にであり、母の死の否認の結果葬儀参列が体面維持のためだけの社会的「非難」を防ぐためだけの冷たい義理の行為としてただ厄介な (incommode) 務めとのみ意識されたが故にであり、棺と老人達の無惨な老醜が死の不安を誘発し、「遺棄」としての母の死に加えて「ママの友人達」の存在が母子一体感の幻想性を暴露して分離不安を再生させ、怨霊としての母が老人達の映像に重なるというように、まことに居心地の悪い (incommode) 通夜であったが故にである。

既述の如く、共生的人間にとって一体感幻想あるいは合体志向はその生の中核をなすものである。そこで合体の夢が杜絶に瀕するときには、むしろ逆に我執的孤絶によってその保全に努める。つまり、外界から一切の情愛的関与を自ら撤収し麻痺させるならば、幻想は現実の場に足掛りを失うが、その代り真空包装の中身のように無傷に保たれうるのである。こうして彼は何事につけ自分は「無感動」(93)なのだと思うだろうし、自分にとって愛など「何の意味もない」(55)と確信しさえするであろう。通夜において崩れかけた母子一体感の幻想を守るために、ムルソオは自分の合体志向の源である一切の情愛性を凍結する。だからこそ母は「この死体」にすぎなくなるのだし、それは彼にとってこそ「何の意味ももたない」と見えた筈だし、老人達は単なる生理的な物音、「溜息と嚙り

泣き」であり「奇妙な舌打ちに似た音」(20)にすぎなくなるのだし、彼自身の自己意識も「腰の痛み」(21)に還元されるのである。又老人達と母との間の情愛的関与の存在も、彼自身の合体志向を刺激するが故に否定されなくてはならない。老人達にとって「この死体」は「何の意味ももたない」のだし、通夜は生理的痛みに耐えるだけの「辛い」義務にすぎないのだと彼には見える。このような心理過程を背景とすれば、通夜が明けて老人達が「出て行くとき、まったく意外なことに、彼等は皆僕と握手した。——まるで互いに一語も交さなかったこの一夜が我々の親しみを増したかのように」(21)というムルソオの言葉も了解されるのである。ここに見られるのは、合体志向の対極にあってそれと表裏一体の、防衛的な心理機制としての我執的孤絶に追い詰められた者の姿なのである。

更にこうした心理過程を前提すれば、ムルソオが老人達に別れて中庭に立つ場面で彼の示す心の動きに対してより一層深い解釈を施すことが可能となる。この箇所について前節で指摘したところは、彼の五感の開放、生きることの歓びの肯定、そして世界へと開けていく心の動きであり、他方、それを微妙に阻碍する、敵対的世界に監視されているという意識の存在である。ここではこれに加えて、彼の示す解放感には、「ママのことさえなかったら、どんな楽しい散歩ができるだろうという気がした」(22)という彼の口振りには虚勢に似たものが感じとれると言わなければならない。彼の述べる生き生きとした感覚印象に、生きる歓びの率直な追求に、その世界への志向に嘘があると言うのではない。ただ、そうした心の動きには通夜で彼が追い込まれた孤絶状態の反動という意味合いもあると、自らの解放感の確認そのものも防衛的な効果をもっていると言いたいのである。

中庭で接した自然は何故彼の気分を通夜で彼が陥った著しく暗いものから昂揚する明るいものへと急転させたのか。霊安室にあったものは、死の不安と分離不安と怨霊への恐怖であり、それらの結果としての我執的孤絶である。自然は、先ず、その永遠の生命力によって死の不安を払拭してくれる。第二に、自然は母なる自然であり自然の母である。養老院の在るマランゴは「丘陵」によ

って「海」と隔てられているが、「丘の上を越える風は塩の匂いをここまで運んできた。」(21)「丘陵」(collines) それ自体がすでに丸いならかな隆起によって母の乳房や母体全体を連想させるが、その上に登れば「海」(la mer)がつまり永遠なる母 (la mère) が望まれるのだ。それはその永遠の生命力の故にも決してムルソオを「遺棄」することのない、その無心の故に決して彼を裏切れることも「怒り」や恨みの萌すこともない永遠の「慈母」⁽²³⁹⁾である。彼の抱く母子一体の幻想が通夜で蒙った傷も母なる自然との確かな一体感によって癒されることであろう。こうした期待が「始まろうとする晴れた一日」(21)を前にして彼の気分を昂揚させるのである。

この文脈において世界へと開けていく彼の心の動きも理解されなければならない。彼が想起するのは「会社の同僚達」や「出勤」(22)の世界である。物語には「同僚達」は具体的にエマニュエル以外には登場しないが、おそらくムルソオやエマニュエル同様に「若い」(12)人達なのであり、未来における死の「恐怖」(164)も過去における「後悔」(142)も知らず、眠りを貪り、労働も含む様々の活動がもたらす生きることの歓びに、つまり「やがておこることに、今日に、明日に、気をとられ」(142)て生きている人達である。彼等と共にする生活もまた通夜でムルソオを襲った様々の不安を払拭してくれ、彼の傷ついた幻想的一体感を癒してくれるだろう。

自然の懐の中で、彼は母の死が惹起したすべての心的葛藤を没却しようとする。永遠なる自然の前には人事は仮象にすぎない、と見える。自然と一体化すれば己が身に纏わる人事も仮象となるだろう、と思う。その限り自然との一体感への渴望は現実を否認したいということと同義である。「ママのことがなかったら、どんな楽しい散歩ができるだろうという気がした」(22)と彼は言う。文脈からして、葬式つまり「ママのこと」と訳されるのであるが、字義通りには、「ママが居なかったら」(s'il n'y avait pas eu maman)ということである。これは不条理な仮定である。単に母親が存在していなければ、子としての彼の存在もなかった筈だということだけからではなくして、共生的人間にとって母

の存在は己が生るの要であり、母が「居なかったら」現実には「どんな楽しみ」も存在しないだろうからである。だから彼の言葉には虚勢があると言わなければならぬ。彼はここで共生的人間の母子関係の現実を否認すること、母との関係がすべての対象関係の原型であるとすれば、つまりは人間世界一般との係わりの現実を否認することによって、自他における合体志向的情愛性の存在を黙殺することによって孤絶のうちに己が心の安定を保とうとしているのである。そしてこの否定された合体志向的情愛性は我執の孤絶が遮断したその回路の方向を人間的世界から自然の世界へと密かに転じようとするのである。とすれば、彼の自然との一体感の主張も幻想性を免れまい。事実、前節で記述した通り、彼に対して自然は敵対的様相を呈することもするのである。

この中庭での、生肯定的自然との交感を対極にもつことによって心に平衡を回復する言わば積極的な、「気負い」に充ちた防衛機制としての我執の孤絶と、通夜における追い詰められた挙句の消極的な、「⁽²⁴⁰⁾脅え」に基づく防衛機制としての我執の孤絶とを区別しなければならない。いずれにおいても、外なる人間世界からの自己疎隔が起るが、その際の知覚の対象構成は後者にあつては既にみたように主に被害妄想的であり、前者にあつては以下にみるように主に、対象の映像が主体の破壊的攻撃性によって歪められるという意味で、迫害妄想的である。

中庭にいたムルソオは院長と呼ばれて、「お母様にお会いになりますか。これが最後ですから」と言われると、門番に尋ねられたときとは異なり、ためらいも見せず「いいえと言った。」(22)すると院長は「声をひそめて(en baissant la voix) 電話に命令した。」(22-23) その語調に「非難」の翳りをムルソオは当然感知したのであろうが、「気負い」が支える対人的な「無感覚」(93)の防衛機制に瀟されて、水面に映る影を水底からはるかに眺めるようなものにすぎなかったであろう。

霊安室に戻って、「棺の釘が締められ、部屋に四人の黒服の男がいるのを、僕は一目で見た。」(24) 通夜のときの不安と被害妄想に彩られた世界は掻き消

えて微塵もその跡を残していない。「無感覚」の防壁越しには、母の棺も今は単なるひとつの棺であり、ただの木の箱にすぎないとすら見える。しかも「釘が締められ」ているから、棺の中に封じ込められている母の怨霊を恐れる必要もない。後の始末は葬儀屋がつけるのであり、もはや何ものもムルソオの内的世界を暴きたてることなく、擾乱をもちこむこともないだろう。彼は今後「自動人形」の如く葬列に加わっていさえすればよいのだ。葬儀は果たさるべき課業と表象されるとともに関心の外に置かれたので、「この瞬間から、すべてがひどく速やかに進行した」(24)という印象を彼がもつのは当然のことと言えよう。

積極的な自己疎隔は外界からの情愛性の撒収とそれと表裏のこととしての生の攻撃性の発動を促すが、それによって外界の対象は即物的に表象され、更には「嗤うべき (ridicules)」(25) であると同時に禍々しいという両様の印象を与えるものとなる。母は今や「死体 (le corps)」(26)、つまりただの物体 (corps) にすぎないし、厳粛なるべき霊柩車は「塗りたてで、長方形にびかびかして、筆入れを思わせた。」(25) このイメージは滑稽な印象を与えるが、同時に、霊安室での棺がまさにそうであったように、「びかびか」光る「筆入れ」のように堅い尖った箱のイメージは禍々しく攻撃的ですからある。看護婦代表はまるで「操り人形」(29) みたいに「微笑ひとつせず骨ばった長い顔でお辞儀した」(24) し、世話人は「おかしな (bizarre) 服」(25) を着ていたと言われる。ペレの滑稽で禍々しい肖像については既に述べた。その際、ムルソオの視線に宿る攻撃性と、老人の奇怪な映像を際立たせる暗い地となっているムルソオの潜在的な死の不安にも併せて言及しておいた。

「おかしなもの」(risible) という知覚印象が、ベルクソンの言うように、対象の人間が生命本来の「しなやかさ」と「生き生きした柔軟性」を瞬時喪失し硬直化して「機械のぎこちなさとも言うべきもの」(241) を呈したときに下される「純粋知性」(242) の判断に基づくものであるとするならば、嗤うことは「生きたもの」を「機械的なもの」(243) と見做すこと、つまり「それはもはや生命に属さない」(244) と断ずることに他ならないから、「感動」(245) つまり情愛的関与を欠いた嗤いとは死

の宣告を下すことに等しいと言えるだろう。⁽²⁴⁶⁾従って、葬行を控えたムルソオの眼前に蝟集する「嗤うべき」同時に禍々しいイメージ群の生成過程は次のように説明されよう。即ち、先ず死と分離の不安の急激な増大があって、初めは反射的に消極的な我執的孤絶に陥った。次いでより安定的と見える積極的孤絶に移行した。そこで外界から情愛的関与が撤去されると並行して解離し活性化した生^{なま}の攻撃性が知覚の隅々にまで滲透し、外界のすべての対象を「嗤うべき」つまりは死に値するものとして血祭りに挙げ、他方では死の席卷する禍々しい外界から己れ独りを疎隔して身の安全を計ろうとするのであると。

以上のような心理的文脈において改めて「僕はママを理解した」(26)という言葉に耳を傾けるならば、ムルソオはここで母への根源的^{根源的}了解の再確認を行っているのであるという前章第三項で示した解釈は不十分であると言わなければならない。それは語り手とは真実を語る人の謂であるという読者の素朴な信仰を前提とした、語り手の言い分をそっくりそのまま受け入れた上での解釈であって、語りの明示的な部分に係わる、テキストの表層的解釈であったが、それとは別に、語り手の無意識の思考を明らかにする、テキストの深層的解釈が可能であろう。後者の観点から見直すならば、このムルソオの主張にはもはや何の現実的根拠も見出しえないので、それは「主観的な⁽²⁴⁷⁾一体感」の独り善がりの表明に過ぎないと言えようし、孤絶のうちにある者のみが抱きうる妄想的確信の響きすら聞こえてくると言える。つまり、彼はここで先述の現実から防衛的に隔離され言わば真空包装下にある一体感幻想を、具体的人間関係とは係わりのない先験的な確信として語っているのであって、そこに表層的解釈の次元においてすら感じられる彼の語気のどこか唐突で空々しいところ、一抹の「非人間的な」(26)風味が由来するのである。更に言えば、彼はこの抽象的な一体感を独り自らに確認すると同時に、そのためにそれに否定的な具体的な事実即ち母の存在の現実を「心の中で」(144)抹殺してもいるのである。だから彼の言葉からは余人の立ち入ることを許さない母子の秘めやかな情愛のさりげない顕れという上辺の「優しい」(171)印象にも拘らず、その独断的な語気が暗示

している通り、きな臭い攻撃性のおいが立ち上ってくるのである。確かに我執的孤絶によって一体感幻想は逆説的に保たれうるが、しかし又積極的孤絶とは孤立し剥き出しになった個性の統御を知らない主張なのであるから母のみならずそれに抗する一切のものを抹殺せずには済まない衝迫を伴うものである。ムルソオの心中に沸き立つこの攻撃性の故にも彼の眼に映る光景は、「溢れる太陽が風景を戦慄させ、非人間的な、気を滅入らすものにしていた」(26)と言われるようなものとなるのである。

分離不安に対する防衛のために他者への情愛的関与を撤去すればするほど孤絶は尖鋭なものになり、それとともに関与の防御膜を失った身体は剥き出して傷つき易いものと意識される。それだけ一層死の不安は強まるわけであり、同時に外界一般に対する脅えと攻撃性が増すわけである。この孤立する個体と環界との間に穿たれた「非人間的な」裂け目を補填し、両者の危機的な緊張関係を緩和する役割を果たしていたのが、一方での母子一体感幻想の闇雲の強化であり、もう一方での自然との一体感の確認なのであった。しかし上に見たように、母子一体を強弁することはその根柢を自ら損うことなしには不可能なのであるから悪循環に陥らざるを得ないし、他方では、死が人間を見舞うのは内なる自然としての身体を介してなのだから、自然との一体感も束の間の「休戦のようなもの」(26)に過ぎず、身体の衰弱とともに自然もその相貌を一変する筈である。だから「暑さがみるみる増し」(25)で「黒服を着て暑かった」(26)と衰弱を感じ始めるとともに、自然はどのような情愛的関与をも受け付けられない「非人間的な」ものと見えてくるし、「気を滅入らせる〔衰弱させる〕」(déprimant)ものと変るのである。かくして母の死とその実存の否認によって、あるいは死を他者の身の上に転嫁することによって己が死の不安から逃れようとする試みのすべては結局内と外の自然の変容とともに烏有に帰するのであって、却ってその過程で孤絶と個性の主張はその頂点へと押し進められ同時に死の不安もその極みに達するのである。

葬列の進行に従ってムルソオにとって自然は次第に「耐え難い」(28)ものと

なり、身体の「衰弱」感が増してくる。「太陽がアスファルトを吹きださせていた。足がその中にめり込んで、ぎらぎらする中身をむき出しにした。車の上では、馭者の防水革の帽子がこの黒い泥の中でこねられたように見えた。僕は青と白の空と、こねかえされたアスファルトの粘っこい黒、式服の褪めた黒、車をつやつやした黒などの単調な色彩との間で、少し我を失ってきた。これらのすべて、太陽、車についていた馬糞と皮の匂い、塗料と香の匂い、不眠の一夜の疲労などが、僕の視力と思想を乱した。」(28) 前節ではこの一節のうちに、環界において不快な刺激が増大するのと並行して、^{たま}生(なま)の攻撃性が解離してくる過程を読みとったのであった。ここでは更に、身体の衰弱と環界の不快刺激の増大が相乗的に作用して己が身体の内と外とが即ち自然の世界全体が己れに敵対し圧殺を計っていると感じられ、死の不安がひとつの頂点に達し、この窮地を脱するためつまり死を下そうとする世界の「怒りや攻撃性」に抗するべく^{たま}生(なま)の攻撃性が解離し発動してくるのであるとしなければならない。

この場面では、朝方中庭でマルソオに快楽に充ちた合体を約束するかに見えた自然はその跡形もなく、まわりのすべては「非人間的」で人を「衰弱させる」ものばかりである。「青と白の空」も「耐え難い」し、地表を塗り潰す「黒」は焼焦げた死体の色、死の色である。又「破裂」し「中身をむき出しに」して「黒い泥」となるアスファルトはやはり腐敗し解体していく死体を思わせる。その「こねかえされた」無形態な「黒い泥」は、コスモス(秩序)としての生の自然の対極にあるカオス(混沌)としての死の自然の象徴である。人は「その中にめり込み」「我を失」いかける、つまり個性喪失としての死に瀕するわけである。死の不安も当然激化するのであるが、それに一見矛盾する死の「不透明な陶醉」(85)への憧れ即ち死の願望の昂まりも又指摘しておかなくてはなるまい。というのも、強いられたものであろうと自ら求めたものであろうと孤絶はひと度は否定された合体志向性を密かに隠しもっているからである。孤絶は世界からの関与の撤収に立脚するが、それは同時に世界を己れに根源的に敵対

するものとするのであり、秘められた合体願望をも又根源的に不可能にすることでもある。しかし、丁度『ボヴァリー夫人』のエマがそうであったように、生の世界において不可能なものとなった合体を死の世界のうちに夢見ることができよう。すべてが「単調」(26)な混沌に帰する死において人は確かに個性を喪失するけれども、そこには又孤絶も存在しないのである。ムルソオが「その中にめり込」む「粘っこい黒」は、彼を死の不安で脅かす色であるとともに又彼を死の「陶醉」に誘う色でもあるのだ。死によく脅える者は又死によく魅了される者でもある。

不快刺激の増大と死の不安の昂まりから解離した^{なま}生の攻撃性の故にペレが「操り人形」と表象され、「ママの棺の上に転がった血の色をした土、そこに混じったいくつかの根の白い肉」(29)がとりわけて強く目に印象付けられたのであると、そしてこのように他者の身体イメージが「身動きしない身体〔物体〕(un corps inerte)」(88)に還元されることは人間のこととしての死の不安を否認することでもあると既に述べておいた。ここではこれに加えて、この「血の色をした土」と「いくつかの根の白い肉」というどぎついまでに鮮かな「印象」(29)にはどこか不吉なものが感じられると言わねばならない。数頁前では単に「棺」(24, 25)と言われるにすぎなかったものが、ここで再び「ママの棺」(29)と呼ばれるようになる。この「ママの」という事新しい限定は母を生気なき(inerte)物体として地中に葬り去ろうとするムルソオの意識の努力を表わしているのである。だがその甲斐も無く彼の無意識の眼には「棺の上」の「血の色をした土」と「いくつかの根の白い肉」はまさにママの「血」と「肉」として映っているのであり、この生気に充ち溢れた「血」と「白い肉」にやがて蘇る母が予感されているのであり、更には母はもう棺の中に居さえしないのだとすらも感じられているのである。後に院長が証言するところでは、ムルソオは「葬式の後で、墓の傍で瞑想に耽らず、すぐに帰ってしまった。」(127)それは蘇る怨霊としての母への恐怖に駆られての遁走であったろう。従って帰りのバスが「アルジェの光の巣に」入ったときの彼の「歓び」(30)とは、死の影の射す余地

もなく母の怨霊も付け入る隙がないと思われる生者達の活気に溢れた「光の巢」に戻ることの「欲び」なのである。しかし怨霊としての母が彼の無意識裡の葛藤の産物なのであってみれば、彼の居るところいつどこでも母は怨霊として蘇ってくる筈なのである。

葬式の翌日ムルソオは「昨日一日の疲れで、起きるのは辛かった」(32)と言う。この「疲れ」は勿論「不眠の一夜の疲労」(28)のことであるが、また我執的孤絶の氣負い故の精神的疲労のことでもあるだろう。次いで「何をしようかと考え、泳ぎに行くことにきめた。」海は既に指摘したように永遠の生命と永遠なる慈母の象徴である。この海の中で彼は己が身に纏わる死の穢れを祓い、心に取り付いた母の怨霊という強迫観念を流し落そうとするのだ。海水浴場には、養老院とは対照的に、「若い連中が沢山いた。」そこには死の翳りはまったくくない。彼はこの海即ち生命の、「水のなかでマリー・カルドナに再会した (retrové)。」(32) 既述のようにマリーはこの物語の中で常に「太陽の色と欲情の焰」(167) 即ち生命の象徴である。つまり彼女は海 (la mer) 「のなか」でムルソオが再び見出した (retrové) 再生せる母 (la mère)、怨霊として蘇る死の母ではなくして、永遠に繰り返し若々しく蘇る生の母なのである。だからこそ彼女の身体は死を孕む個性を想起させるような特徴を付与されることなく、不特定の生命的身体として、いつでも他の身体と置き換えるものとされているのである。彼女が、「女達」(65) がそのように表象される限り、ムルソオが母を失うことは永遠になく、又母の死がない以上己が死と分離の不安もないことになる。

浮標の上では「空がすっかり眼におさまって、青く金色に輝いていた。首筋の下で、マリーの腹が穏やかに波打つ (battre) のが感じられた。」(32) 埋葬の日の「耐え難い「青と白の空」と同じ真昼の空でありながら、この「青く金色に輝く空は「すっかり眼におさまって」いる。又通夜に居合わせた「老女達」の「とび出た (bombé) 腹」(18)、破裂して死の空虚を眼前に晒さんばかりの、新しい生命を産み出すのではなく、呑込み、死児を収めるための空洞を抱

えているような、攻撃的に「目立つ〔突き出る〕(ressortir)」(18) 腹とはまったく相異して、「マリーの腹」はムルソオを「隠やかに」受容し彼に永遠の生命の鼓動(battre)を聞かせる。彼はこの姿勢のまま「ながいこと、半ば眠りながら、浮標の上にいる」(32) のである。前節ではここにすべての感官の開放とその結果としての心の開かれた眠りを認めた。今は更に、彼のこの「眠り」は胎児の眠りであると言わなければならない。彼がなんの抵抗もなく「すっかり」受容されている空と海の世界は、人間がこの世で最初に出会う自然的世界としての母の子宮であるだろう。海は羊水であり、そこに漂う「浮標」は胎盤とも見える。母の胎内で彼は全き生命の「隠やか」な律動(battre)に身を委ねて眠っているのである。空想の母の胎内に回帰することによって、現実の母の死が巻き起した死と分離の、孤絶の不安を鎮め、拭い去り、新たな再生を計ろうとするのである。従ってここに理想化を、人と自然的世界との交感を理想化することによって破綻した母子一体の幻想を修復しようとする無意識の作業を認めないわけにはいかない。結局これは⁽²⁴⁸⁾ 霊安室の暗い気分から中庭で生肯定的自然に接することによって一挙に明るい気分への脱出を計ろうとした心理過程と同じ類いのものなのだ。

ここで精神分析学の言う「躁的な防衛機制」という概念が想起される。対象喪失に際しての躁的防衛機制とは、「対象を失ったことによる分離不安と見棄てられた不安、そして悲哀の苦痛」又「自分自身の死の不安や、対象喪失ともなう種々の自己愛の傷つきを直視すること」を「回避しようとする心の術策」のことである。⁽²⁴⁸⁾ 人は様々な仕方での「苦痛」と「不安」からの逃避を試みる。例えば、先ず「死者を無縁なもの、排除すべきものとして扱う心理」によって、あるいは「眼前にある外的社会的世界」への「適応への逃避」⁽²⁴⁹⁾ によって、更には「失った対象を軽視する態度」つまり「失った対象が、自分にとってたいした意味を持ってはいなかった、だからあまりショックもないし関係ないという態度をとる」⁽²⁵⁰⁾ ことによって、そしてアルコール・性的な快楽・仕事への「耽溺」や「失った対象に向いていたさまざまな欲求を、別の対象によ

(252)
 て満たそうとする置き換えの心理」によって。

ムルソオが母の死の知らせを受け取ってから埋葬の翌日マリーに再会するまでの彼の言動を逐一分析して、拙論が本項のこれまでのところで明らかにしてきた彼の特徴的な態度、即ち母の死を更にはその実存すらも否認し、そうすることによって己が死と分離の不安を回避し併せて怨霊としての母の蘇りを封じようとする、その一方で理想化された自然との一体感に浸ろうとする態度は、如上の定義に照して明らかにすべて「躁的な防衛機制」と呼ばれて然るべきものであろう。彼が「ママの顔を見ようとせず、煙草を喫い、眠り、ミルク・コーヒーを飲んだ」(128)のも、「葬式の後で、墓の傍で瞑想に耽らず、すぐに帰ってしまった」のも、生者の世界に立って死んだ母を「無縁なもの、排除すべきものとして扱う心理」が働いていたからである。母の死を告げる電報を読んで動揺も悲哀も口にすることなく日程のことに拘泥したのも、葬式で喪主の役割に没頭したのも、葬式の翌日目覚めるとすぐ社長の不機嫌な訳を考えたのもすべて「適応への逃避」の心理である。「ママはいつも黙って僕のすることを眼で追うだけであった」とか、すべては「習慣の問題である。僕が今年になってからほとんどここへ足を向けなくなったのは、幾分そのせいだった。それにまたせっかくの日曜日をつぶしてしまうからでもあった。——バスの乗り場に行き、切符を買い、二時間もゆられる骨折りは別としても」(12)といった露悪的な口吻も喪った母を「軽視」しようとする態度の現われである。更に、前節で指摘したように彼にはアルコールへの「耽溺」の傾向が認められるし、又マリーは終始彼の「欲情」(32)の一官能的対象に止まり続けるし「大通り」で行き交う未知の「女達」(65)も彼が「知ったすべての女達」も「女への欲情」(110)の対象である限りにおいて彼の関心を惹いている。勿論それは彼が「若いのだから、当然のことだった」(32)とも言え、これだけで直ちに性的快樂への「耽溺」を云々することはできないが、少なくとも若い女達を官能的身体としてのみ表象しているところに性的快樂への過剰な関心を認めることはできよう。そして休暇明けの月曜日に「会社でよく働いた」(40)のも、それに続く「一週間ぶっ

とおしによく働いた」(53)のも仕事に没頭することによって対象喪失を忘却しようとする心理が与っていてもいたからなのである。

同様に、マリーについても、躁的防衛の観点から再度、彼女はムルソオの「置き換えの心理」が生み出した、喪われた母の代理であると言っているのである。しかもそれは永遠の生命と慈愛の母として理想化された母なのであって、現実の母が彼に残した死と分離の不安、報復への恐怖を鎮めるとともに彼の「自己愛」的一体感幻想が負った様々の痛手を癒すために彼の無意識の「心の術策」が生み出したものなのである。だから、「夜、マリーはすべてを忘れていた」(33)と彼が言うのも、他人の心中は「結局のところは、誰にも分らない」(43)なのであってみれば、マリーのそのように無心に生の喜びを享受する姿を見ることを彼が望んでいたからであり、むしろ彼こそが彼女との生きる喜びの交感の中で「すべてを忘れ」去ろうとしたのだとしなければならないのである。

だが躁的防衛の産物はまたあっさり躁的防衛によって消去される運命にある。後に死刑囚ムルソオは次の如く述懐する。「彼女はたぶん死刑囚の情婦でいるのに厭気がさしたのだろうと僕は思った。病気かもしれないし、死んだのかもしれないという気もした。当然の成行きだった。どうして僕にそれを知ることができようか、いまは離れてしまった二つの身体のほか、僕らを結びつけているものは何もないのに。それに、このときから、マリーの記憶は、僕の関心をひかなくなつたようだった。死んだのなら、もう僕は興味はない。」(161-162)ここに躁的な防衛機制のひとつである失った愛の対象の「軽視」を、「自分の自己愛を満たしてくれているあいだは、その対象を美化するが、ひとたび自分から離れ、自分を見棄てたととなると、まったく価値のない存在とみなしてしまう心理〔……〕そしてその対象を失った時点で、こうした対象の蔑視が起ると、それ以前のかかわりすべてを無価値で無意味だったという心理」⁽²⁵³⁾を認めることは容易であると思われる。

E. メランコリー

フロイトは周知の如く、愛する対象の喪失に伴う反応を正常な反応としての悲哀と病的な反応としてのメランコリー(鬱)に分けた。メランコリーの特徴は「一方では愛の対象へのつよい固着があるにちががなく、他方ではこれに矛盾して対象充当の抵抗がほとんどない」というところにある。この場合「解放されたリビドーは他の対象に移動せず、自我に戻ってくる。だがここではリビドーは任意に用いられはしないで、放棄された対象と自我を同一視するようになる。対象の映像が自我に投影されて、自我は放棄された対象と同じ対象として、特別な力域によって判定されるようになる。このようにして対象の喪失は自我の喪失に変化し、自我と愛する人との葛藤は、批判的自我と同一視によって変化した自我との間の対立に変わる。(傍点は原著者)⁽²⁵⁴⁾」そこから「悲哀では欠けている一つのもの、すなわち自我〔尊〕感情の著しい低下⁽²⁵⁵⁾」が結果するのである。⁽²⁵⁶⁾

こうした過程が生ずるとするのも「メランコリーに罹る素質、ないしはこの素質の一部」⁽²⁵⁷⁾をもつ人の場合、「ナルチシズムの基礎のうえに対象選択が行われ、従って対象充当は困難に出会うと、ナルチシズムにもどる」⁽²⁵⁸⁾からである。この自己の分身としての限りにおいて、つまり他者をその個性性を否定しておいた限りにおいて愛の対象とするというナルチシズム的な対象選択こそ、拙論に言う共生的人間に顕著な、我執を秘めた合体志向性なのであり、一体感幻想の基底をなすものなのである。ムルソオは母の死を否認し、母の実存すらも否認することによって、愛の対象とともに「対象への愛」⁽²⁵⁹⁾をも同時に捨てたかにも見える。しかし実の所「同一視」によって母は彼の自我の内部にとりこまれていたのである。それが死後現身としては不在の人となりつつも彼を導く知恵として物語に母が遍在する理由である。

上の引用文でフロイトが「自我の喪失」と呼んでいるものは、この表現が用いられている一節の文脈からして、具体的には「自己卑下」⁽²⁶⁰⁾のことであり、結局「自責」⁽²⁶¹⁾、「自嘲」⁽²⁶¹⁾、「追放と処罰」への「期待」を内容とするときられる「自

我感情の著しい低下⁽²⁶²⁾」と同じ事態を指していると思われる。しかし他方では、メランコリーはまた正常な反応としての悲哀と同じく「深刻な苦痛にみちた不機嫌、外界への興味の喪失、愛する能力の喪失、あらゆる行動の制止⁽²⁶³⁾」を示すとされていて、この事態も又字義通りの意味での、即ち「自我それ自体が貧弱かつ空虚になる⁽²⁶⁴⁾」という意味での「自我の喪失」と呼ばれてよいのではないだろうか。このような「自我の喪失」が起るというのも「対象の喪失」即ち対象の離反あるいは死が、対象との間に「同一視」の働いている自己自身の喪失つまり自己の「遺棄」あるいは死と観取されるからである。躁的防衛とは、この対象喪失を否認すると同時に対象喪失に伴って起る自己喪失を否認するための「心の術策」である。対象喪失の否認は対象の実存の否認に極まり、対象が実存しなかったとすれば、その喪失もなかったことになり、従って「遺棄」つまり「自我の喪失」もないことになるのである。

さて翻ってムルソオを見ると、彼には以上の如きメランコリーの主要な症状即ち「自責」や「自嘲」として表われる「自我感情の著しい低下」も、「制止」として表われる「自我の喪失」も顕著には認められない。しかしそうした外見も様々な躁的防衛が効を奏している限りのことなのである。躁的防衛は長期間に亘って効力を発揮する場合もあると言われる。だがその場合にもメランコリー（鬱）が存在しないということではないだろう。鬱はただ後景に退いただけなのであり、それ故にこそ躁的防衛が必要となるのであり、又この躁的防衛の破綻が重度の鬱を招くというのも、意識から悲哀が排除されていればそれだけ一層無意識過程において「メランコリーの作業⁽²⁶⁵⁾」は増悪しつつ進行することになるからなのである。母の埋葬から殺人に至るまでのムルソオの生活描写のうちに「まるで暗い背景のように、自己高揚の浮れた気分の背後から、見えかくれ姿を見せている⁽²⁶⁶⁾」というメランコリー（抑鬱気分）を見出すことができるであろうか。

森山によると、軽鬱状態において「基本的に目立つ点は、この状態の患者の言動は全体としてほぼ整い、第三者にはただ疲れているという程度にしか映ら

ないことである。いわば患者は、『健康者』と、現実を共有しているように見えるのである。(傍点は鈴木) 患者が訴える心的症状としては、「億劫だ」、「気が湧かない」などといった「抑制」、「気分が重い」などという「抑うづ気分」ないし「なんとなく不安だ」などという「不安感」、「考えがまとまらない」などという「思考の渋滞」があり、更に「対人回避の態度」がしばしば見られる。患者の訴える身体症状の多くは「全身の疲労感・違和感を基盤にもち、これに様々な限局性の疲労感・違和感が加わってくる。これはまず頭部に現われ、頭重感となる(以上傍点は原著者)」ほか「あらゆる身体部分に現われうる。」更に「食欲不振(稀には異常昂進)と体重減少・性能力低下があり」、これに様々の「自律神経症状が加わってくる。」但しここで注意すべきは、「これら身体症状は、上述の心的症状と表裏の関係にあり、時にはしばしばこれらのみが状態の前景を覆ってしまうことも多い」ことであり、又「以上の諸症状のうちの特定のものとかが、それらの変形とかが患者の訴えの前景を占めることがむしろ多いものである。それはしばしば、『離人症』、『強迫症状』、『不安』、『心気症』等の形をとる⁽²⁶⁷⁾」という点である。つまり軽鬱状態であるや否やの判断が下されるにあたって、ここに記述された心身症状の全てが患者によって訴えられている必要はないということなのである。又注意すべきは「〔鬱病の〕病初期には親友との邂逅や飲酒などの快適な刺激があれば、生命のリズムはもち直し不快な気分が消失することも⁽²⁶⁸⁾」あることであって、軽鬱状態における患者の気分は必ずしも抑鬱一色に塗り潰されているわけではないのである。

拙論は第一節において、ムルソオの心的世界を構成する原理として明るい気分と暗い気分を析出し、両者の対立しつつ併存している関係を見出した。そして暗い気分における彼の心身状態を様々な角度から記述したが、身体的次元に限定して見たとき、疲労感の訴えを典型とする様々の心気症様の訴えを確認したのであった。又「軽いうつ状態は朝の起床時がもっとも具合がわるく、夕方になると好転してくるという日内変動を伴って⁽²⁶⁹⁾」いると言われるが、ムルソオは「この時刻〔朝〕に、彼ら〔会社の同僚達〕は出勤のために床をはなれる。僕

はそれがいつも一番骨の折れる時刻だった」(22)と、埋葬の翌日には「昨日一日の疲れで、起きるのが辛かった」(32)と、犯行当日の朝は「僕は容易に眼がさめず、マリーが何度も名を呼んで、ゆすぶらなければならなかった。僕は自分が全く虚脱したみたいで、少し頭が痛かった」(71)と述べ、寝起きの悪さとともに頭痛を訴えている。更に、既述のように、食欲不振も二度訴えている。

暗い気分の心的次元での表われとしては、ムルソオが犯行当日の朝に訴える「虚脱」感を典型とするような倦怠の気分があるが、この倦怠感は前節で述べたように彼の場合根深いものであって、それはマリーが帰った後で彼が独りで過ごす日曜日の生活の描写によく窺えたのである。勿論、「今日は日曜日だと思っ、うんざりした。日曜日は嫌いなのだ」(34)という言葉で、彼のよう^にに独身でしかも独り暮らしの人間の場合の休日^にに有りがちな無聊やその結果としての気分の沈滞への恐れを表わすものとする^{こと}はできる。だが、これも前節で述べたことだが、彼は「若い」のだし、疾走のような単純な運動に始まって「遊戯」(54)から勤労の「歓び」(148)に至る様々な活動の歓びを知っているのである。彼は前日と同じように「泳ぎに行く」こともできたろうし、そこで出会うであろう「知っている幾人か」の「近所の娘達」(38)の中にマリーに代わる遊び相手を見つけることもできた筈なのである。だから彼のこの言葉に、「外的社会的世界」への没頭という躁的防衛が働きにくい休日のような状況^をできるだけ回避したいという心理を読み取らないわけにはいかないのである。「外的社会的」な事柄に関心を逸らしえなくなるとともにそれまで陰にあった心的様態が顕在化してくるのであって、ここに日曜日の無聊による以上のもっと根深い倦怠と引き籠りの心理を認めざるを得ないのである。このムルソオの引き籠りつまり「対人回避の態度」は「いつものとおりにはセレストの店で昼食はしたくなかった」(34)という言葉に端的に窺われよう。

又、既に本節で述べたように、ムルソオには死と分離の「不安」が、怨霊として蘇る母という「強迫」的観念が、母を養老院に入れたことが話題となるや否や「非難」を感じとり必要以上の「釈明」(11)をしようとするところに「強迫」

の罪責観念がそれぞれ潜在すると推定される。

ムルソオは、埋葬の日には「不眠の一夜の疲労などが、僕の視力と思想を乱した」(28)と言い、法廷でも「ママを葬った日、僕はひどく疲れて、眠かった。その結果、行われていることがよく理解できなかった」(94)と言っている。前節では、彼の身体が過敏なところとともに脆弱なところを秘めていることを指摘し、この脆弱さには多分に心理的な理由もあろうと述べておいた。ここでは更に、彼の「思想」の「乱」れをもたらしたものはただ単に「不眠の一夜の疲労など」という身体的理由ばかりではなくて、抑鬱状態とそれに因る「思考の渋滞」もあったであろうと言うことができよう。

「離人症」についてはどうか。「古典的記述性から出立して、軽うつ状態における心的世界の構造をとらえようとする時、いわゆる離人症状が、もっとも有効な足がかりとなる⁽²⁷⁰⁾」と言われるが、この離人症状とは「自我の喪失感、自我の離隔感、感情の喪失感、事物の非実在感、時間的経過そのものの非連続感、自我の非連続感、空間の非存在感、などである。これを一言で言ってしまうれば、自我、時間、空間、事物などのすべてに通じての『現実感の喪失』と言ってもよい。」⁽²⁷¹⁾ これをおおまかに言えば、離人症状とは「自我の喪失」と「世界の非存在」⁽²⁷²⁾であるということになる。両者は「一つの根本的な異常体験の両面にすぎない」⁽²⁷³⁾のであるが、実際の臨床精神医学の場では、「すべての症状を完備した典型的な離人症というものは、数からすると比較的まれな症状といわなければならない。」⁽²⁷⁴⁾ 従って軽鬱状態に現われる離人症において、患者自身はその症状の半面のみを、例えば対象世界の「現実感の喪失」のみを訴えている場合も十分ありうるわけである。又対象世界の「非実在感」なるものは、一般的には、「事物はすでに遠隔化し、立体感を失い平面化する。りんかくがぼけ、ピンとこず、ヴェールをかぶったようである。そして冷たくよそよそしい。他人もまたよそよそしく、なじめず、患者は皆から浮き上がった存在である」⁽²⁷⁵⁾というように説明されているが、逆に「景色が異常に鮮明にはっきり見え」⁽²⁷⁶⁾る場合もあると言われてもいる。

それでは先ず、対象世界の「現実感の喪失」はムルソオに認められるであろうか。霊安室の場面を検討してみよう。彼は室内に母の老友達が入って来たときのことを次のように述べている。「僕の前に、影はひとつもなく、どの物体も、角も、すべての曲線も、眼を傷つける明確さで描き出されていた。〔……〕僕は今までこんなに人を見たことはないほど、注視して、彼等の顔と衣服の細部を、何ひとつ見逃さなかった。それなのに彼等からは何の音も聞こえないので、彼等の現実性を信じにくかった。〔……〕それが挨拶なのかそれとも筋肉の痙攣なのか、僕には分らなかった。〔……〕彼等がそこに居るのは、僕を裁くためだという、滑稽な印象を、僕は一瞬持った。」(18-19) 事物が「立体感を失い平面化する」ということは、物理的には事物がそれに奥行を与える「影」を失うことであるが、心理的に言えば事物が「意味」(20)を失うことであろう。そしてすべてが等価に知覚されるということであろう。この場面の場合、ムルソオの眼には「どの物体」も「影」(意味)を失って見え、それらの「すべて」がそしてすべての「細部」が等価に知覚されているのと同様に、母の老友達も「影」(意味)を失ってその「顔」、「衣服」がそしてそれらすべての「細部」が等価に知覚されているのである。だから、彼が老人達に「現実性」を感じないのは「何の音も聞こえない」からだけでは決してない。第一彼は老人達が入室するときに立てた「ものの擦れ合う音で〔うたた寝から〕覚めた」(18)のだった。対象世界が「意味」によって再構成されていないからこそ、すべての「細部」が同等に知覚されることを要求して「何ひとつ見逃さなかった」ということになるのであり、それ故にこそ対象の「現実性〔実在性〕(réalité)を信じにくかった」り、「挨拶なのかそれとも筋肉の痙攣なのか〔……〕分らなかった」りすることになるのである。この場面では、対象世界は「りんかくがぼけ」ていず、逆に「眼を傷つける明確さ」をもっているが、その説明はムルソオの側の脅えにもとめられよう。ここで外界が著しく敵対的な様相を帯びて見えるのは、既述の如くムルソオの内部に死と分離の不安の昂まりとそれと並行して起る^{なま}生の攻撃性の解離があるからである。そうした被害・迫害妄想的な精

神状態においては対象世界の「すべて」に対する「注視」は当然のことであり、又この「注視」の下には対象は禍々しく「異常に鮮明にはっきり見え」ざるを得ないであろう。そして彼の潜在的な被害・迫害妄想の故に老人達は「よそよそしく、なじめず」、自分が周囲から「浮き上がった存在」であると感じられ、果ては「彼等がそこにいるのは、僕を裁くためだ」というような「印象」をもつに至るのである。

次に、「自我の喪失」をムルソオに認めることはできるであろうか。「自我の喪失」とは「『自分が存在しない』という特異な体験⁽²⁷⁷⁾」のことである。これを敷衍すれば、典型的には、「自分というものがまるで感じられない。自分というものがなくなってしまった。自分というものがどこか非常に遠いところへ行ってしまった。いままでこうやって話しているのは嘘の自分です」というような体験のことである。ムルソオはこれほどに明確な形では「自我の喪失」を訴えてはいない。しかし彼にはその前段階としての「自我の離隔感」つまり「自分がどこか非常に遠いところ」にいる感じ、「真の自己と空虚な自己との分離⁽²⁷⁹⁾」を感じていた節がある。彼自身は別段そうした感覚を「自我の離隔感」として記述したり訴えたりしているわけではないが、例えば先ず、読者が読後作品全体から受ける、語り手ムルソオと語られるムルソオの間の「分離」の印象がある。一方での「今日、ママが死んだ」(9)という語り出しと他方での「僕を憎悪の叫びで迎えてくれることを望めばよいのだった」(172)という締め括りが象徴的に示しているように、語り手ムルソオは所々で語られるムルソオと重なり合うが、遙かに一点景を眺めやるように語られるムルソオを見てもいるのである。又、自己の外面と内面の「分離」としての「自我の離隔感」を窺わせるものとしては、彼が予審期間中の独居房生活でもった次のような体験がある。「僕は鉄製の碗に顔を映して見た。映像は僕がそれに微笑みかけようとしても、真面目な表情をしているように思われた。」(115) この場面以前にも、既にみたように犯行当日の朝に彼は心身両面に互る「虚脱〔空虚〕」(vide)を訴えているし、マリーの立ち去った後の日曜日の次のような体験にも「世界の非存在」

ではなく自我の非存在を認めることができる。「ガラス戸を閉めて戻ってくると、鏡の中にアルコール焔炉とパンが並んでいるテーブルの一端が見えた。」(39) 彼自身は映っていないことに注意しよう。それと対照的に「アルコール焔炉とパン」と「テーブル」が彼に代って恰も部屋の主になったかのように、奇妙な実在感をもって迫ってくるのである。これは自我の「空虚」と相即的に対象的事物が「異常に鮮明に」知覚される場合の一つであろう。ただ、靈安室の場面では人間が「物体」化つまり「非生氣(inerte)」(88) 化されていたが、ここでは事物が生氣化つまり有情化されているという相異がある。

更に、『異邦人』の文体についてのサルトルの指摘が正しいとすると、つまりこの作品の「各文は一つの現在」であって「次の文とは一つの虚無によって隔てられている」⁽²⁸⁰⁾ という印象が正しいとすると、ムルソオの語りの文体そのものが離人症的時間意識即ち「時間の非連続性（「てんでんばらばらでつながりのない無数の今」）」を形態化していることになるのであり、同時にこれと表裏の事態としての『自分』の非連続性、非同一性の体験即ち「自我の喪失」をも文体そのものが表わしていることになる。というのも、「いわゆる『体験内在的』な時間の実感が成立しうるためには、自分はずねに自分であるという確信が存在していなくてはならぬ（以上傍点は原著者）」⁽²⁸¹⁾ からである。

さて以上のように、一般に軽鬱状態に特徴的とされる様々な症状の多くがムルソオに確認及至推定されえたとして、彼の示す症状の各々は単に彼の軽鬱状態の一環をなすものとして位置付けられればすむものなのであろうか。そうした症状は、彼の陥った軽鬱状態が、少なくともある程度においては、愛の「対象の喪失」（母の死）を引き金として生じたものであることをそれぞれの仕方でも説明してもいるのではないだろうか。

例えば、「朝の起床時」の不快感を如実に示すものであった犯行当日の朝のムルソオの表情をマリーは「むっつりした顔（«une tête d'enterrement»）」(71) と評しているが、原文ではこの評言は引用符で囲まれている。この引用符によってこの言葉はその文字通りの「埋葬のときの顔」という意味をも併せ持つ

ことになり、ムルソオの訴える「頭が痛かった」ことや「虚脱」感は作者自らの手によって母の「埋葬」(死)と関連付けられているのである。又、彼が食欲の不振を訴えるのは、霊安室で母の棺を前にしたときと(16)、サラマン老人の泣き声を聞いて喪き母を連想したときであって(61)、いずれも母の喪失が強く意識されたときなのである。そして又「日曜日」に彼が示す「いつものとおりセレストの店で昼食はしたくなかった」という「対人回避の態度」には、「きっと彼等に〔母の埋葬のことを〕質問されるだろうが、それがいやだった」(34)と彼が自ら明らかにしている通り母の喪失が深く関わっているのである。更に、彼の抱く「不安」や「強迫」の源は、既述のように、一体感幻想のつまり愛の対象としての母の喪失にあるのである。

ムルソオの示す離人症的な対象知覚についても同様である。「日曜日」の夜の部屋で「生氣なき物体 (corps inerte)」(88)が生氣を帯びて見えてくるのは、ムルソオのうちに原始的あるいは幼児的な「アニミズム」的心性が復活しているからであるが、この心理的退行は母の死が意識されかかるとともに働く抑圧の結果である。この日、屋の間に、彼は部屋が「ママのいたところは丁度よかった (il était commode)。今では僕には大き過ぎる (Maintenant il est trop grand)」(34)と過去と現在を対照して改めて部屋に空白を覚えそれを生み出した母の——死の事実そのものではなく——不在を確認する。そして夜になって「鏡」を見た後で次のようにこの一日の日記を締め括っている。「僕は思った、相も変らぬお務めの日曜日だった、ママは今では土のなか (enterrée)、自分はまた仕事にかえる、結局何も変りはしなかった、と。」(39) 既述のように、母子一体を幻想する共生的人間にとって母の喪失は即自己の喪失と観取される。そこから鏡の中からの自己の映像の消失に象徴される「自我の喪失」が生じ、その裏返しとしての事物の「非実在感」も生じてくる。ただこの場合、事物は疎隔されると同時に有情化をうけてむしろ異常な実在感を与えるものになっているが、これはムルソオの潜在的な「不安」の、「今では」もう「生氣なき物体」に成り果てた筈の母が怨霊として蘇ってくるのではないかという不安の故なので

ある。だから「相も変らぬお務めの日曜日」、「自分はまた仕事にかえる」、「何も変りはしなかった」と畳掛けていささかくどい印象を与える、自分の日常生活の秩序の再確認によって彼は顕在化してくる「不安」と「強迫」的観念を押しさえ付けようとするのである。母は本当に「今では土の中」なのか。事物の有情化は母の霊が事物に憑依しているからなのであり、薄闇に息衝く事物は怨霊として蘇る母を無気味に予告するものなのである。

離人症は一般に、「一種の自我防衛機制」であり、「患者にとって現実の存在が耐えがたいものであるために、患者は現実の自然および世界に対する志向を根本的に中止して非現実を体験するに至るのだ⁽²⁸²⁾」と言われる。拙論が明らかにしてきたように、ムルソオには根本的な「現実」(母の死)否認の態度と様々の躁的な「防衛機制」の企てが、孤絶による外界への情愛的関与の全面的な撤回即ち「自然および世界に対する志向を根本的に中止」する態度が認められる。そこから例えば霊安室での「現実性を信じにくかった」という印象や鏡に映る事物の有情化といった両様の「非現実」の体験が生ずるのである。従って、共生的人間がその愛の対象の喪失に際して示す軽度の抑鬱状態の一指標として離人症様の症状もまたそれ自体「一種の自我防衛機制」なのである。だがそれはメランコリーの一層の増悪をまねきかねない両刃の刃である。というのも「[人間的]世界に対する志向」の、況んや「自然および世界に対する[合体的]志向の」「根本的」な「中止」に成る孤絶の状態こそ共生的人間にとって致命的な事態であるからだ。

ともかくも以上の次第からして、ムルソオは母を埋葬してから犯行に及ぶまでの間、母の喪失への反応としての、少なくとも軽度の鬱状態にあったと判断してよからう。この鬱状態は、勿論母の喪失を誘因としていると看做しうるところもあって、単に反応性のものとしてのみ了解さるべきではないが、フロイトの言う「メランコリーに罹る素質」つまり鬱への長い準備段階としての気質や性格の問題については、本節においてもその簡単な素描を試みるとはいえ、次節の主要な課題であるので、ここでは指摘するに止めておこう。

ムルソオの犯行の解釈に移ろう。アラブ人殺害はムルソオのそれまでの「現実の自然および世界に対する志向を根本的に中止」する態度が限界を迎えることによって「軽うつ状態における離人的世界」から「妄想的⁽²⁸³⁾世界」へと「一步だけ足を踏み出した」(87)所で起るのであり、表の死と分離の不安が臨界に達するのと相即的に裏の死の願望も極まった刹那に起るのである。

先ず拙論がこれまでに示した解釈をざっと一互り振り返ってみる。前節では、犯行当日のムルソオの言動をその起床から犯行へと逐次辿ることによって、一方では生の攻撃性が解離し活性化していき、他方ではそれと相関的に自然的世界全体の相貌が敵対的に変容していく過程を明らかにした。本節では、死の不安が著しく昂まった結果死を他者の上に転嫁しようとして殺人が犯され、同時に死の否認の機制が働いてアラブ人の死体 (corps) が物体 (corps) 視されたのであるとした。またレエモン^{なま}の負傷を眼にして彼の死の不安が急激に昂じたとも述べておいた。この最後の点は、ムルソオのような共生的人間の身体意識の共感的共生的性質を考慮すれば理解は容易であろう。つまりレエモンとの間に「同一視」が働いていたので、レエモンの受けた傷をムルソオは己が身の上のことと感じとったのである。

ムルソオの人知れず育む母子一体の幻想は母の喪失に遭遇して根底から震撼され、その復元のために必要とされて登場したのが母親代理としてのマリーであった。また、共生的人間は母親との間に密かに紡いだ一体感幻想を爾余のすべての対象関係にも無意識のうちに投影して生きていくのであるから、言わば扇の要に位置する母子一体の幻想の蒙った攻撃はそれを原型として象られた幻想的一体感一般に速やかに波及し、対象関係全般に罅が入ることになる。この揺らいだ一般的な幻想的一体感の立ち直りのために必要とされ登場するのがレエモンなのである。

レエモンは自分の情婦の兄に当たるアラブ人の男との「立ち回り」(45)を語った後で、ムルソオに「自分も又丁度、この事件について僕〔ムルソオ〕の意見を求めたく思っている。僕は一個の男子であり、人生を知っているから、彼〔レ

エモン] を助ける (aider) ことができるし、そうすれば (ensuite) 彼は僕の仲間 (copain) になるだろうと言った。僕が何も言わずにいると、彼は仲間になりたいかと聞いた。僕がどうしてもいいと答えると、彼は満足そうな様子だった。」(46) ここで先ず注目されるのは、レエモンが「仲間」という言葉に高い価値を与えていること、「仲間」と認めてやるのは恩恵を施すに等しいことと考えていること、そしてこの恩恵に浴するには「一個の男子であり、人生を知っている」だけでは不十分なのであって「助ける」という何か有形の証が、実を示すことが必要とされていることである。むしろ後者があって初めて前者の評価が生きてくるということなのだ。それを如実に示しているのが、手紙の代作をムルソオがしてやった直後に見られるレエモンの態度の変化である。「《思っていた通りだ、お前は人生を知っているよ》僕は彼〔レエモン〕にお前呼ばわり (tutoyait) されたことに始めは気付かなかった。彼に大声で《これでお前はほんとの仲間だなあ》と言われて、驚いたとき、やっとそれに気が付いた。」(51) 情婦の「ごまかし」を「罰する」(49) ためという大義名分があるとはいえ、彼女を「誘き出し」て「虐待」するという「道徳的にいかがわしい」(141) 企みのためとも言えなくはない手紙を「レエモンを満足させるために専心」(50) して認めてやることによって、ムルソオは「彼の共犯者」(136) になったのであり、そこに「人生を知っている」という評価は裏付けを得て、レエモンは初めて「仲間」という御墨付を与えたのである。結局、レエモンの人間関係の取り結び方は自己中心的であり、相手は自分の願望を充たす、自分の分身である限りにおいて愛の対象となるという意味でナルシシスミックであると言わなければならないまい。こうした判断の更なる論拠として、レエモンの、相手の心理の機微を察するよりは、むしろ一方的な解釈を下すことで満足し且つその解釈を相手に押し付けて憚らない態度を挙げることができよう。「仲間」という言葉は「何の意味もない」(64) という意味でムルソオは「どうしてもいい」と答えたのだが、レエモンはそれを「仲間」になってもいいという返事なのだ勝手に解釈し、「満足そうな様子」を示したのである。又、「あなた (vous)」(45) から「お前」へ

の変化にムルソオが「驚いた」のも、この移調が一方的で、唐突に感じられたからに他ならない。この「驚いた」事実からすると、「彼はよく (souvent) 僕に話しかけ、僕が話相手になってやるので、ときにはちょっとうちに来ることもある」とムルソオが説明するそれまでの両者の関係は、さして親しくもない「同じ階の隣人」(44) 同士の関係を超えなかったと推察される。それが「共謀で手紙を書い」(141) たことを理由として一挙に「仲間」関係が成立したとレエモンに看做されるということは、事の是非を問わず、「自分がしたいと願っていること」(49) を一緒にするかしないか、「自分の考え」(50) を共にするかしないかを彼が関係の親疎を定める踏絵にしているということなのであり、彼の対人的関係の形式がナルシシスム的であるということなのである。第一章で述べたように、セレストとムルソオとの間に成立したような信義の間柄においては、先ず相手への全面的な肯定と受容がすべてに先立つ暗黙の前提とされ、そこから相手を「助ける」というような行為も自から派生してくるのであるが、レエモンはこの順序を丁度逆様にしていると言えよう。この夜別れるにあたって、彼はムルソオに「男同士はいつでも分りあえるものだ」(52) と言っているが、厳密に言ってムルソオの何を「分」ったと言うのだろうか。彼は結局自分が受容・肯定されることばかりを望み、その証しとして「頼み」(49) を叶えてくれることを求め、そのようにして自分の思うままになる限りのムルソオを「仲間」として一方的に承認したのである。

この夜レエモンがムルソオに出会ったのは確かに偶然であるし、又ムルソオの方が彼の「包帯」に注目して「どうしたのか」(45) と問わなかったならば「立ち回り」のことも話題に上らず、彼が手紙の代作のことを持ち出すこともなかったかのようなのであるが、「そのための手紙を書く自信がないので、僕〔ムルソオ〕に代作してもらうことを考えていたのだ (il avait pensé à moi)」(50) と言うからには、彼はその実初めからムルソオをあてにしていたと言える。だがこの「頼み」を持ち出すに当たっての彼の態度は極めて慎重であって、先ずどの程度自分が相手に受容されているか、受容されるか確かめながら話を進めてい

く。「立ち回り」の話を彼は「分^わつて^くれ^ます^ね、ムルソオさん」(45)と切り出し、「ね、お分^わり^でし^よう、僕が仕掛けたんじゃない、あっちが僕を侮辱したんだ」(46)と結ぶ。そしてムルソオが「それは本当だ」と「認めた」のを見てから、「意見を求めたく思っている」と「話」に取り掛かる。だがその「話」に直ぐには入らず、なお慎重を期して、「仲間になりたいか」と尋ねる。相手の少なくとも拒絶とはうけとれない反応を見て「満足」し「少しためらいをみせた」ものの情婦の「話」(46)を始めるのである。その話が一段落すると、いよいよ本題の「頼みたいこと」に入るのだが、その前に、「この話をどう思うか知りたい」と言い、更に、「ごまかしがあったと思うか」と尋ね、「女を罰すべきか、自分の立場にいたらどうするか」と畳掛ける。こうして相手の受容度を計りつつ、同時に相手の受容の素振りや言葉のひとつひとつを言質に取りつつ、相手がどうしても否とは言えない所へと追^おい^か詰^めていく手際は用意周到と言う他ない。結局、「女を罰したいのは理解^うけ^りで^きる」(49)というムルソオの言葉を引き出したところでレエモンは初めて「彼の考えを打ち明けた」(50)のであった。

このようにレエモンのムルソオへの接し方を吟味してみると、そこに彼の特徴的な対人的行動の様式を決定する二つの因子を識別できる。一つは、自分がどれだけ相手に受容されるか、つまり我が儘^がが許されるかということへの関心であり、いま一つは、どれだけ相手を利用できるか、つまり我が-儘^がにすることができるとのことへの関心である。いずれにしても、己が個性性の主張と他者の個性性の否定に成り立つ関係を目差しての気遣いであることには変りはない。そのような目論見は当然のことながら相手の抵抗に出合うことが予想されるので、慎重に用心深く事を運ばざるを得ない。「内と外を区別する目安は遠慮の有無である」とすれば、彼は初めのうちこそ「あなた」(vous)を用い、「ためらい」を見せ、話を慎重に進めることによって「遠慮」を示し、ムルソオを「外」の人として扱っていたのだが、彼の我が儘にムルソオが徹底して受容的な態度を示すのを見、彼の我が-儘^がになってくれる確証をムルソオが手紙の代作をしたことに得たと思うや、途端に無「遠慮」となって「お前呼ばわ

り」し、ムルソオを「身内とか仲間内⁽²⁸⁵⁾」として扱うに至るのである。土居はこのような心理過程を「甘え」と呼んだのであった。⁽²⁸⁶⁾ 拙論の用語で言えば我執的同一化ということになる。

翻ってこのようなレエモンに対するムルソオの側の反応を見ると、手紙の代作に当たっては「レエモンを満足させるために専心した。彼を満足させない理由は僕にはなかったから」(50-51)と言ったり、「彼の仲間だろうと、僕にはどうでもいいことだし、彼は本当にそうなりたいたらしかった」(51)などという言い方によく窺われるように、ムルソオの態度は無限に「包容的」⁽²⁸⁷⁾ であって、レエモンの態度を甘えと呼ぶならば、ムルソオのそれは「純粹な迎合」(135)であり母性的な甘やかしであると言えるだろう。そして「甘えるということは結局母子の分離の事実を心理的に否定しようとするものである」⁽²⁸⁸⁾ ならば、母も又甘やかすことによってこの「分離の事実」を否定しようとすると言えるのであり、「仲間」というような幻想の一体感を醸成し易い言葉を表面では避ける素振りを見せつつも、その実ムルソオはレエモンを「満足」させ甘やかすことのうちに、潜在「心理的に」は息子としての自分をレエモンに投影し自らは喪った母を演ずるといふ幻想の母子関係を仮構することによって「情緒的に自他一致の状態をかもしだ」⁽²⁸⁹⁾ し、自らの一体感幻想が母の喪失に際して被った痛手を癒そうとしているのである。そうした事情はこの夜二人が別れるに当たって、一方で「ママの死」(51)が言及されるとともに、他方でそれにほとんど直ぐ続けて「男同士はいつも分り合えるものだ」(52)とされているところにもよく窺われよう。

「彼の仲間だろうと、僕にはどうでもいいことだ」というムルソオの口吻からして、一見するところでは、ここで彼はレエモンの側からする合体志向を撥ね付け併せて「仲間」という語の含意する一体感幻想を否定しているかに見える。しかしそうした彼の「平静」(127)な態度は母の喪失に際して傷ついた一体感幻想を現実の転変に晒すことによってその傷口をこれ以上上げまいとする防衛的な心理の表われなのであって、彼の一体感幻想そのものは「平静」の防壁の奥

深く温存され続けるのである。この心理機制は彼のマリーに対する態度のうちに認められるものと軌を一にしている。マリーも又「愛」(64)や「結婚」(65)という言葉によって彼に合体を迫るのであり、彼の方は「それはなんの意味もない」とか「どうでもいい」と答えることによって、己が胸中に人知れず育む一体感幻想が破綻する真のあるような現実との生々しい接触を回避しようとするのである。しかしその実一体感幻想は無意識裡に作動しているのであって、後に彼自ら「僕らは二人の動作と満足感がしっくり一致するのを感じた」(76)と言うであろう。ただこの場合にも、彼が合体を実感しえたのは、既述のように、一体感幻想が生の現実との接触によって動揺を蒙ることのないように予めマリーを生命的官能的身体に還元しその実存を捨象しているからに他ならないのである。

レエモンとの場合、レエモンの顕わな甘えの態度換言すれば我執的同一化による合体志向の露骨な表出に対して示されたムルソオの反応のもつ二重性、即ち表層の言動と思考が呈するあくまで「平静」な外観と、深層の合体志向の無意識的な作動との関係は結局次のように説明されよう。先ずムルソオは「仲間」であろうとなかろうと「どうでもいい」と相手に面と向かって言ったり、相手の「お前呼ばわり」に「驚いた」自分を確かめることによって、自分との間に成立したと主張される「仲間」関係が実のところ誰の目から見ても相手の独り芝居にすぎないことは明らかであるとしておく。次に、自ら心理的に関与している事実もその可能性もまったくないとすると、そうした関係においては自分は常にフリー・ハンドでいられ、関係の成否にも消長にもなんら影響されずにすむであろうと思う。そして、こうして「平静」の維持が内面的にもどこまでも保証されるとなると、見掛けの行動の上ではどれほど関係に深入りすることになるように見えることをしても構わないことになる。ムルソオのレエモンを「満足させるために専心」する行為は、その状況という客観的な文脈からすれば彼をレエモンの「共犯者」(136)とするに足るものであり、両者の関係はそれによってのびきならないものになるかもしれないという懸念を、たとえ漠た

るものであろうと、ムルソオは抱いて当然と思われるが、彼は自分の行動の動機を「仲間になりたい」からではなく「彼を満足させない理由は僕にはなかったから」だと自らに説明することによって、つまりそれは博愛的な無償の行為であるとすることによって、心理的には相変らず自分はフリー・ハンドであると思ひ込むことができるのである。このように行動とその意味の当初の現実的な連関が断たれ、その繋がりが恣意的で主観的なものとなると、そこに乗じて純粋に主観的な幻想が意味の座を僭取するに至る。つまり意識が行動に施した無償の行為という意味付けの恣意性と主観性に付け入って一体感幻想が潜勢力を揮い出しいつの間にか意味の座を実質的には篡奪してしまうという事態が生ずるのである。意識がその無償性に免じて看過した際限のない受容的行動は、捨我的同一化が通常とる行動形態との相同性故に、抑圧されている合体願望の呼び水となり活路となり、相互に呼応し助長し合う関係を結ぶに至るのである。勿論この行動と意味との新たな結び付きはあく迄人(意識の)目を忍ぶ密通なのであって、レエモンに見受けられるような抑圧されていない合体願望とその臆するところの無い表現との間の公然の結び付きとは異なる。というのもムルソオの意識は傷ついた幻想の一体感が現実との接触によってこれ以上の衝撃を蒙らないようにするために、合体願望を抑圧しているからである。この地下に封じ込められた合体志向が、いかに闇に根を張ろうとも、晴れて陽(意識)の目を見ることは、現に結んだその実が認知されることは原理的にはどこまでもありえないことなのである。だからこそ、「男同士はいつでも分り合えるものだ」と言うのはレエモンであってムルソオではなかったのだし、又ムルソオはこれになんの賛意も表しはしなかったのだ。

確かに、合体願望の抑圧を一時的に緩めても幻想の一体感が損傷を蒙る虞はないと意識が判断する場合もある。例えば、相手がマリーのように純粋な生命的身体に還元されている場合(76-77)とか、あるいはセレストのように相手の方が紛う方ない全的な肯定と受容の姿勢を示している場合(132)であって、このとき合体志向は抑圧されていた分だけ激烈に噴出する。尤もそのような場合

にも合体を現に見ることが許されるのはその場限りのことであるし、しかもその体験はセレストとの場合に見られるように独白によって表明されるだけで相手と共有するところとならず、生の現実との接触はここでも回避されているのである。

レエモンとの場合、たとえ刹那的な純粋に主観的なものに止まるにしろこうした合体の絶対的な「確信」(99)にムルソオが達した形跡がないということは、ムルソオの意識がレエモンに対しては抑圧がある程度以上緩めることに危険を感じていたのだということになる。実際よく見るとムルソオは「仲間」関係という合体幻想にもその「共犯〔荷担〕者」であるレエモンその人にもさしたる価値を認めていないのである。物語り末尾で自分の人生を総括するに当たって彼は、「レエモンが彼より勝れた〔価値のある〕セレストと同様に僕の仲間でもそれがどうした！」(170)と言っている。この言葉は先ず、彼が「仲間」関係そのものにたいした「価値」を置いていなかったことをはっきりと証している。事実予審期間中と死刑判決後のいずれの独房生活においても、彼が自発的に想起する知人の中には、司祭に激昂する場面を除けば、レエモンの姿はまったく見られず、セレストがエマニュエルと一緒に一度だけ思い浮かべられることがある(165)とはいえ、彼の念頭にあるのは専ら母のことであり次いでマリーのことだけである。更に、彼のこの言葉によって彼が内心ではセレストに比べてレエモンを「価値」の劣った人物と看做していたことが分るし、その見方は両者の「仲間」関係の成立の前後を通じておそらく変ることはなかったであろうと推察されるのである。又事実、逮捕後のムルソオはセレストとのかつての友誼を偲んで、犯罪に直接係わりのない思い出の種々に法廷においても(130)独房においても(165)言い及ぶことはあるが、レエモンとのそれはまったく思い出すことはないのである。

かくして、レエモンの我執的同一化への無償の対応という隠れ蓑の下に意識の関門を擦り抜けえたかに見えたムルソオの潜在的合体志向は、再び先ず「仲間」関係への不信、次いで当の「仲間」のレエモンその人へのその身勝手さ故

の不信という二つの障碍に阻まれて、^{うつつ}現にその確かな表われと証をかちうるには至らず、そこに虚しく空転する幻想は儚いと知りつつ耽る酒の酔いのようなものだ。それ故合体幻想の相方との別れがくると同時に、酒を切らしたアルコール中毒患者がおそらくそうであるように、幻想は忽ち雲散霧消し、その後は合体を夢見た分だけそして所詮虚しいと知りつつ我知らず縊っていた幻想であるだけに一層気分^の落ち込みは激しく、世界は荒涼とし、寂寥感^は耐え難く、救いのない奈落に独り落ちていく思いがするに違いない。レエモンと別れた直後の心境をムルソオは次のように語っている。「彼の家から出て、扉をしめると、僕はしばらく踊り場の闇 (le noir) の中に立ち止った。家中が静まり返って (calme), 階段吹抜きの底 (profondeurs) から、湿り気を帯びた得体の知れない風 (un souffle obscur) が吹き上げてきた。自分の血がずきずき脈打つだけのを耳に聞きながら、僕は身動きしなかった。ただサラマノ老人の部屋で、犬がかすかに (sourdement) 唸った (agémi)。」(52) 疾うに芝居が跳ねた後の舞台に独り残されている自分に気付いた役者のように、彼の眼前にあるのは寂寞たる「闇」だけである。闇の中に寝静まっている筈の「家中」の人々は、丁度彼自身の態度がそう人々に見えたように、よそよそしく「平静」(calme) である。そして人影の無い「静まり返った」闇の中に今や主然として奈落を思わせる「階段の吹抜け」が無気味に息衝き始める。その「湿った」腥い「吐息」(souffle) は、奈落の「底」からの呼び掛けであり、「たったひとつの運命」(170) である死の「ある暗い息吹 (un souffle obscur)」(169) のことである。つまり合体幻想から醒めて元の木阿弥の孤絶に立ち返るや否や忽ち死の不安が襲いかかり彼を居竦ませその「身動き」を奪ったのである。その時、あの母を埋葬した日に「顛顛に血が脈打つのを感じた」(29) ように、彼は「自分の血がずきずき脈打つだけのを耳に聞いている。どれほど彼が「ママの死」を「遅かれ早かれ来るべきことだ」と自然現象だと割り切ろうと努めてみても、抑圧された過去の対象喪失の心理状態が同一の身体感覚を媒介として活性化し、「得体の知れない」それ「だけ」に彼の意識を惹き付け呪縛してしまう。というのも、メランコリー

においては「対象への愛は捨てることができず、対象だけが捨てられる⁽²⁹⁰⁾」からである。彼の意識の眼には「対象」の欄が空白のまま再燃したこの「愛」の状況を象徴するものは「血」である。「血」の意識とは死と分離の不安を引き金にして自他の間に交錯した^{なま}生の攻撃性の臃気な再認であり、相互の敵意と怒りが再び炸裂する遺棄の状況への予感なのである。既述のように彼は母との関係をサラマノ老人とその飼犬の關係に投影しているが、ここでも彼の無意識の耳は犬が「かすかに唸った」のを母が「密かに」(sourdement)「嘆いた」(a gémi)と聞いているのである。この怨霊としての母の怒りを前にしてはどれほど強固に仕組まれた一体感幻想も退散する他ない。こうして苛烈な死と分離の不安に防ぐ術もなく対峙することを迫られたムルソオにとって、死がむしろ望ましいものに思われてきても当然というものであろう。というのも、第一に一体感幻想は彼のような共生的人間の命であってそれを奪われては「人生は生きる労をとるに値しない」(160)と見えようからである。第二に、命を賭しても回復を願われる幻想的一体感であるが、それはその原型となった母子一体感の再確立による以外にはなく、先ず母の怒りを鎮めて和解を計ることから始めなければならないが、「母を心の中で殺した」(144)息子が母の怒りを解きうる手立てとしてはただ自らを殺すことだけが残されていると思われようからである。そして第三には、この死が亡き母の胎内での死であるならば、息子は母との葛藤を知る以前の、そして未来永劫にそれを知る虞のない死の母子一体のうちに「安らぎ (repos)」(85)を見出せると思われもしようからである。「闇」の中の「階段吹抜け」(cage d'escalier)の「暗い」(obscur)、「湿り気を帯びた」(humide)空洞は息子のムルソオがその誕生に際して辿った産道であり、再び母の胎内で「血」が「脈打つ」音つまり母の心臓の「鼓動 (battre)」(29)とその遠く「鈍い響き (bourdonnements)」(52)それ「だけを聞こうとするのであるが、今その「底」知れぬ母の胎内からは人をこの世に蘇らす生命の息吹きではなく、ただ死の「暗い息吹き」が吹き上げてくるのである。何故なら、この母胎は既に「死んだ女の」ものであるからであり、又たとえ死の母にも再生力があるとしても、

「母を心の中で殺した」息子に母が再生を許す筈もなく息子の方も再びこの世で母を殺す愚を敢て繰り返そうとは思うまいからである。だからここでムルソオを胎内回帰に誘う母胎は死の「檻」(cage)なのであって、彼はその中に死児として永久に閉じこめられることを我知らず願っているのであり、彼のこの無意識的な母胎内回帰の願望は退行的なものであり、死の願望なのである。

(この項つづく)

《付記》『異邦人』を含むカミュの著作からの引用箇所の訳出にあたっては、新潮世界文学48『カミュⅠ』・同49『カミュⅡ』の訳文をほぼ踏襲し、併せて新潮文庫版『異邦人』窪田啓作訳を随時参照した。

〔注〕(第2節つづき)

(226) 引用文に直統する()内の数字は『異邦人』の原書 Albert Camus, *L'Etranger*, Gallimard, 1942. の頁数を示す。以下同じ。

(227) フィッシャー, 前掲書, p. 234.

(228) 同書, p. 232.

(229) 同書, p. 234.

(230)-(231) 同書, p. 256.

(232) フロイト『トーテムとタブー』, 吉田正己訳, 改訂版フロイド選集第6巻収録, 日本教文社, p. 239.

(233) フィッシャー, 前掲書, pp. 250-251.

(234) フロイト『不気味なもの』, p. 304.

(235) 同書, p. 317.

(236) 同書, p. 306.

(237) 同書, p. 303.

(238) 同書, p. 315.

(239) B. & R. ジャスティス『ブロークン・タブー』, 山田和夫・高塚雄介訳, 新泉社, p. 150.

(240) 「脅え」と「気負い」の概念については, 森山公夫『躁うつ病者における性

格と発病状況の両極的把握について』, 現代のエスプリ No. 88 所収, 至文堂, p. 62. 参照。但し, 森山は「脅え」と「気負い」を「対象化傾向と共感性, ないし執我欲と捨我欲」(同頁)の気分における表われとしているが, 拙論は次節で論ずるように, 「気負い」もその表面の「共感的」「捨我的」様相にも拘らず「脅え」と同じく「執我欲」に根差していると考ええる。「脅え」も「気負い」も陰と陽, あるいは顕在的か潜在的かの違いはあれ同じ事態の表裏である。

(241) Henri Bergson: *Le Rire*, PUF, 1972, p. 8.

(242) *Ibid.*, p. 4.

(243) *Ibid.*, p. 26.

(244) *Ibid.*, p. 25.

(245) *Ibid.*, p. 3.

(246) ベルクソンが「おかしさ (le comique) は, 集団をなしている何人かの人々が自分たちの感性 (sensibilité) を沈黙させ, ただ知性 (intelligence) のみを

働かせながら、全員がなかまのひとりに注意を向けるときに生まれてくるように思われる(傍点は鈴木) (*Ibid.*, p. 6. 但し、訳文は鈴木力衛・仲沢紀雄共訳『笑い』, ベルクソン全集3所収, 白水社, p. 20. のままである。)と言うとき、一方での「無関心 (*indifférence*)」あるいは「無感動 (*insensibilité*)」 (*Ibid.*, p. 3.) と他方での「純粹知性」 (*Ibid.*, p. 4.) の連帯が「笑い (*rire*)」 (*Ibid.*, p. 3.) を構成する必須の要件であるとするとき、彼の言う「笑い」とは嗤いのことであり嘲笑や冷笑なのであって、その「笑い」の定義は一面的であると言わなければならない。例えば、ムルソオの描き出すペレの肖像は〈*risible*〉とか〈*comique*〉とかいう言葉こそ使われていないが、その「ぎこちない身振り」(25)と「操り人形」のような「気絶」(29)によってベルクソンの言う「おかしなもの」の条件を十分充たしている筈であるし、又ムルソオ自身にペレを笑いものにする意図が明らかに窺えるのであって、暗々裡に彼の「知性は他の知性達と通じ合って」 (*Ibid.*, p. 4.) 知性の結託を成立させている筈であるが、彼はここで実際には嗤いも笑いもしていない。と言うより笑えないのである。それというのも「もし人が自分を孤立していると感じたならば、おかしさを味わわないだろう」 (*Ibid.*, p. 4. 邦訳, p. 18.) と言われるように、彼がこの場面で拙論に言う孤絶の状態にあるからであるが、この孤絶はベルクソンの主張するような「知性」の「孤立」ではな

くして、ベルクソンが笑いにとつての「これ以上の大敵はない」と言った「感動 (*émotion*)」 (*Ibid.*, p. 3.) の欠如、つまり「感性」の連帯の失われた状態のことなのである。

- (247) 土居, 前掲書, p. 105.
 (248) 小此木啓吾『対象喪失』, 中央公論社, p. 89.
 (249) 同書, p. 88.
 (250) 同書, p. 89.
 (251) 同書, p. 90.
 (252) 同書, p. 93.
 (253) 同書, p. 91.
 (254) フロイト『悲哀とメランコリー』, 加藤正明訳, 改訂版フロイト選集第10巻収録, 日本教文社, p. 134.
 (255) 同書, pp. 133-134.
 (256) 同書, p. 129.
 (257) 同書, p. 135.
 (258) 同書, p. 134.
 (259) 同書, p. 136.
 (260)-(261) 同書, p. 131.
 (262) 同書, p. 129.
 (263) 同書, p. 126.
 (264) 同書, p. 129.
 (265) 同書, p. 144.
 (266) テレンバッハ, 前掲書, p. 315.
 (267) 森山公夫『躁うつ病論の解体から疾患単位論の解体へ』, 笠原嘉編『躁うつ病の精神病理 I』, 弘文堂, pp. 155-156.
 (268)-(269) 大原健士郎他編『鬱(うつ)病』, 有斐閣, p. 60.
 (270) 森山, 前掲書, p. 157.
 (271) 木村, 前掲書, pp. 19-20.

- (272) 同書, p. 55. (285) 同書, p. 40.
- (273) 同書, p. 37. (286) 土居の「甘え」の概念の多義性は既に様々な論者によって批判されてきた。拙論はここではこの語を『「甘え」の構造』の用法においても又現代の日常的な用法においても最も支配的であると思われる語義に限定して用いる。そして「甘え」の概念に関する拙論なりの議論は次節以降に譲ることとする。
- (274) 同書, p. 55.
- (275) 森山, 前掲書, p. 158.
- (276) 村上仁『改訂版異常心理学』, 岩波書店, p. 94.
- (277) 木村, 前掲書, p. 24.
- (278) 同書, p. 17.
- (279) 同書, p. 21.
- (280) サルトル, 前掲書, p. 53.
- (281) 木村, 前掲書, pp. 44-45.
- (282) 同書, p. 56.
- (283) 森山, 前掲書, p. 159.
- (284) 土居, 『「甘え」の構造』, p. 38.
- (287) 土居, 前掲書, p. 84.
- (288) 同書, p. 82.
- (289) 同書, p. 83.
- (290) フロイト, 前掲書, p. 136.